

**第2回昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画策定委員会
議事要旨**

< 日 時 > 令和6年7月17(水) 18:30～

< 場 所 > 昭島市役所 204 会議室

< 出席者 > (敬称略)

【 委 員 】

松本 祐一 (会長/多摩大学経営情報学部教授、多摩大学総合研究所所長)、秋山 伸子 (昭島ボランティアセンター運営委員、民生委員・児童委員)、伊藤 正人 (昭島市消防団団長)、岩下 亮平 (社会福祉法人 昭島市社会福祉協議会地域支援係長)、大山 弘一郎 (OKプロジェクト実行委員会メンバー)、高田 英梨紗 (昭島市リーダーズクラブ (ALC) 代表)、高橋 靖和 (昭島市自治会連合会会長)、倉持 伸江 (東京学芸大学教育学部 生涯教育分野 准教授)、来住野 清子 (公募市民)、幸田 義康 (公募市民)

【 事務局 】

枝吉 敦子 (市民部長)、山田 恵理 (生活コミュニティ課長)、伊藤 奨 (市民活動推進係長)、若名 高彰 (市民活動推進係)、永瀬 万愛 (市民活動推進係)

【 傍聴者 】

3名

< 配布資料 >

—机上配布—

- ・資料1 昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画の構成 (案)
- ・資料2 第1回昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画策定委員会議事要旨

< 議事要旨 >

1 開会

【 事務局より連絡・報告事項 】

2 委員長挨拶

委員長：

前回初めて顔を合わせて議論したが、皆さんが地域の中でやっている活動、仕事などを話していただき、地域の現実がこうなっているということが非常によくわかった。皆さんの現場感覚を大事にしながら、市民の方にとって身近で、やっていこうと思える計画を作っていきたいと思う。本日も引き続き活発な議論をお願いしたい。

3 議題

(1) 計画の構成案について

【 事務局より計画の構成案について説明 】

【 質疑 】

○計画期間について

大山委員：

計画期間が 2025 年度から 2031 年度までの 7 年間というのはなにか根拠があるのか。

事務局：

総合基本計画の期間が 2031 年度までになっているため、それに合わせた期間として
いる。

○構成について

倉持委員：

「5. 新たな地域コミュニティの在り方検討」の位置付けについて説明してほしい。

事務局：

総合基本計画に記載されている、目指していきたいコミュニティを記載している。総合基本計画策定から数年経過していることやその後の社会変化も考え、委員のご意見を
いただく中で追加する視点があれば加えたい。追加する視点も含め、昭島市として、こ
れから目指すべき地域コミュニティの在り方を記載し、それと合わせて基本方針をどう
作っていくか、という流れで考えている。

倉持委員：

目指す姿やこれまで出てこなかった視点、あるいは今後の重点を取り入れた項目とい
う位置付けか。

高橋委員：

どこまで行政が自治会に口を挟むのか。自治会は自治だから自分たちでやりなさいと
言っておきながら、計画を策定したから、これからはこうやってくださいという言い方
をしてしまうと、ますます、自治会離れ、地域のコミュニティ離れを起してしまうの
ではないかと、この案文からは感じた。どうしたらうまく全体が繋がるか、という視
点を打ち出した文言にしていかないと、絵に描いた餅にしかない。確かに、自治会
は加入率も低く、弱くはなっている。しかし、それを少ないからどうだというような意
見を言ってしまうと、では市が勝手にやればいい話、となってしまう。

委員長：

市の計画は、市がやることだけが書かれているわけではないと思う。読んだ人が、行
政が基本方針を決めて、それを地域に落としていくと感じてしまうと、高橋委員がおっ
しゃるように、上から降ってきた感覚を持つというのはあると思う。表現などは工夫し
た方がいいと感じる。市民から見ると、どうしても、市の計画は難しいものであったり

遠いものと感じたりしてしまう。本計画はコミュニティに関する計画のため、市民から見てもわかりやすく、そして、市民の自治の動きを尊重するような表現は非常に重要だと感じる。

大山委員：

「2. 現状と課題」で「本格的な人口減少・超高齢社会の到来をはじめとする社会経済情勢の変化に伴い…」と記載があるが、昭島市は、現状まだ人口が増えている。ここで大型のマンションが建設されるなど。今の昭島市の人口動態を見ると、この表現は違うと思う。

「5. 新たな地域コミュニティの在り方検討」で「高齢者の地域の課題解決に主要な役割を果たす地域包括ケアシステムの深化を図っています。」と記載があるが、厚生労働省はその進化の先に地域共生型社会をうたっている。本来は、もう地域共生型社会へのシフト変更が必要だと思う。縦断的に、縦割りを廃止しながら皆さんでやっていくと言っているため、表現を変更した方がいいのではないかと。

伊藤委員：

「5. 新たな地域コミュニティの在り方検討」で「地域で活動する多様な団体が、それぞれの得意分野を活かし、共助の考えの下、自治会をはじめとする既存のコミュニティとの連携を高めていくことは大変重要な視点です。」とあるが、地域で活動する多様な団体というのはどのくらいの範囲を考えているのか。いろいろな活動内容の団体があると思うが、それらを全部ひっくるめてなのか。あるいは、福祉やボランティア的な意味合いを持っている活動をしている団体に限られるのか。また、市で、そういった団体の具体的な数は把握しているのか。

事務局：

地域で活動する多様な団体には、ボランティアなどもあるが、生涯学習の分野、サークル活動もある。ボランティアと生涯学習・サークルとを比べると、一見、異なる種類に見えるが、生涯学習・サークルから派生して自分たちが培ったスキルを他者にどう還元できるか活動を発展していくこともある。ボランティア団体やNPOだけでなく、地域にあるさまざまな団体が、計画で言う「多様な団体」に含まれると考えている。数の把握については、第1回の委員会で資料配布した、庁内及び社会福祉協議会に向けて令和6年度に実施した調査結果が参考となる。多様な団体の現状把握の初期段階。

岩下委員：

大山委員からも地域包括ケアシステムについて次のステップではないかという話があった。現在、国では、重層的支援体制の整備が始まっていて、都内でも3分の1ぐらいが動き出している。昭島市でどれだけ進んでいるのか把握していないが、その点も記載した方がいいと思う。また、高齢者に関する記載は多いが、若い層、障害の方、引きこもりのような方については見えづらい。全部書き切るのは難しいと思うが、そのあたり

に触れなくていいのか、と感じた。

高橋委員：

自治会の加入率の低下は、コミュニティを作りすぎたことが一つの問題だと思う。行政が縦割りで、自分の配下のところにコミュニティを作ってしまうという悪しき傾向がある。なんでもコミュニティ化したことで、かえって全てバラバラになっている。あっちもコミュニティ、こっちもコミュニティというように、できた当初は盛り上がるかもしれないが、うまく持続しない。住んでいるところは一つで、活動範囲も決まっているのだから、その中で人を奪い合うのは無駄なことをしている気がする。

例えばウィズユースで、子どもを取り込むとなっても、ウィズユースの役員は自治会員ではない。活動は立派だが、その人たちは、地域の我々のような人間と情報伝達することはできない。そうすると全く別の組織になってしまう。同じ地域にいても連携はゼロ。福祉的なことでも、それぞれが関係している部署が違えば、全然情報は回ってこない。コミュニティというのは、住んでいるところでコンパクトに作り上げていかないと、実際の災害においても機能していかないとと思う。会えばどっちが上だ、下だ、というようなどうでもいいことを言い出すし、そうではなく、どうしたらうまく丸くなるかということに特化した方がいいと思う。

委員長：

皆さんからの意見の中でポイントは、「コミュニティ」という言葉。いろいろな意味合いで使われることが多い。地縁のコミュニティ：自治会のようなものもコミュニティと呼び、テーマのコミュニティ：子どもをテーマにした活動や団体などもコミュニティと呼んだりする。この計画の中で使われているコミュニティという言葉を見たときに、皆さんがイメージするものがばらばら。最初の「1. 昭島市地域コミュニティ活動連携推進計画とは」で、コミュニティという言葉の定義、どういうつもり使っているということを説明しておかないと、ずれた文脈で計画を読み、これって違うよねというような反応が増えてしまう気がする。地域コミュニティをどういう意味合いで使っているのか、その中には自治会も入り、テーマのコミュニティも入るということを明確にした方がいい。

また、倉持委員からも指摘があった通り、「5」がなにを伝えるところなのかわかりづらい。総合基本計画に掲げた基本施策のうち、コミュニティ活動の推進を図るため、地域活動の推進と担い手の育成、地域活動の環境整備については引き続きやると書いてある。その中で大きな課題である、新たな地域コミュニティの在り方を模索して、その実現に向けて特化した計画を作ると。総合基本計画にもいろいろ書いてあるが、あえてその中から一つ引っ張り出して、このためだけの計画を作ろうというのが本計画。引っ張り出したものがなんなのか明確でないと、なぜ、あえて別の計画を策定したのか疑問を感じるのではないか。それが「5. 新たな地域コミュニティのあり方」ということだと思う。先ほどご指摘があったような国の制度の変化。また、総合基本計画を作ってい

たころはコロナ禍であったため、その色がずいぶん出ていたと思う。そこから社会の状況が変わっていたり、逆に人口が増えて昭島市にとってはプラスになっている部分もあったり、その一方で、自治会の状況を踏まえるとやはり総合基本計画を作ったときは状況が少し違う。変わった部分についてはブラッシュアップ、更新をしていかないとずれが生じる。

この計画がなんであって、他の計画とはどう違うのかということは、最初のところで言った方がいいと思う。

「5」を細かく見ていくと、1段落目は共助のことや、災害の話がありつつ自治会などの状況が書かれており、現状このように加入率が低く、活動実態や活動内容が未加入者に知られてない現状があるというような形で結ばれている。この部分は、どちらかという新しいコミュニティの在り方の背景が書いてあるので、前半の課題とかぶる。一方で、2段落目は超高齢化社会の話をしていて、特に高齢者にやさしい地域づくりが必要というところで結んでいる。この段落は、特に高齢者に特化、意識を向けたことやらないといけないという新たな方針のようなことが書いてある。3段落目は、健康づくりや社会参加の場で、安否確認体制の充実を図る必要があるという形で終わっている。ここは地域包括ケアシステムの話と繋がっているところだと思うが、ここもある程度新たな方針のようなことが書いてある。4段落目は多様な団体がいるという話、そこがもう少し連携しないといけないという新たな視点が提示されている。その後はDXを生かしましょうというような話が最後に書いてあるが、皆さんの指摘を考えると、「5」は、新たな方針を決めるための視点などを整理する節にした方がすっきりすると感じる。

先ほど高橋委員のおっしゃった、自治会というのは自治だから、その自治を大切にしたいといけない、というのも一つの視点だと思う。方針を決めるために、こういう視点があつた方がいいのではないかなというようなことを皆さんも出していただけると、より具体的になるのではないかな。次の項目に方針が書いてあるので、そこうまく繋がるのではないかなと感ずる。

高橋委員：

「5」のタイトルだと現在を否定しているように捉えられるので、変えた方がいい。今までが悪かったから新しいものを作らなくてはいけないと言われてしまうと、今までやっていた人たちはなんなのになってしまうのでは。今後こういう案がありますよ、というようなタイトルに変えてもらいたい。コミュニティのあり方は検討しなきゃいけないほどなのか、となってしまう。

委員長：

今まであったものを大事にしようという視点もあれば、時代に合わせて少しプラスしないといけないものもある。制度が変わっていくので、そういう視点も必要だということをしつかりと整理した方がいい。全否定というのもよくない。

幸田委員：

目指す姿というところで、「新たな担い手が育ち、また新たなコミュニティが誕生しています」となっている。それをやるのは誰なのかというと、「自治会など市民団体が災害時の対応や地域の課題解決に向け…」と書かれている。自治会が解決に取り組む活動を市としては支援します、新たなコミュニティの場を作ることを支援します、となると、結局やるのは市民団体。市として支援する。あくまで市は支援するだけでやるのはあなたたちというふうに読めてしまうのではないか。

秋山委員：

この計画は、現在それぞれで活動している自治会やサロンなどをつないで総合的なコミュニティに持っていこうと聞こえる。今活動している人たちは、自分たちの活動を楽しく、そして、自分の生活を充実させるために一生懸命やっているのだから、地域のためになにかをしようという気持ちとは違う気がする。地域で防災に強くなろうという別のものを作り上げて、そこに向けてみんながやっていくとしていかないと。今あるものをつなげてやっていこうとしても、皆さんの気持ちがそういう活動に向いていかない。昭島市では、今こういうコミュニティを推進しているというところで、それぞれの小さいグループの気持ちが向かっていくのであればわかるが、今のものをつないで作っていくのは違うと感じた。

大山委員：

今まで皆さんが活動してきたことは非常に素晴らしいこと。今後もそういった活動、特に自治会などは永年にわたって皆さん代わる代わる運営に携わっていただき、今後も主となるとても重要な活動だと思う。しかし、一方で誤解を恐れずにお話すると、現在多様化ということが盛んに言われている。自治会だけにこだわらず、さまざまな活動をそれぞれが考えてやっていけばいいという風潮が世の中にすごくあると思う。いろいろな活動があって、それぞれに顔を出して行って、でもなんとなくまとまらない、地域作りができてない、というところで、これを連携しながらやっていけるといいというのがこの計画のような気がする。今までの既存の活動も活発にしながら、より人数が増えればいいが、増えないということもあり得るので、いろいろな団体を増やして行ってそれが連携しながら、どういかしていくかという方法もあるのかなとも思う。そういったことがここで考えられればと思うが、先ほどお話あったように、これにはリーダーが必要だと思う。計画があって、みんなで作ってくださいと言っても、誰がまとめて行って引っ張っていくのか計画上見えてこないと思った。

委員長：

「6. 基本方針」は、総合基本計画とは違う書きぶりになっているのか。

事務局：

総合基本計画を変えずにそのまま記載している。

委員長：

もしかしたらその部分が、皆さんが話していた齟齬が生まれる原因になっているのか

もしれない。前半の方で新たな話をした後に、基本方針で前の総合基本計画がそのまま載ってしまうと繋がりが悪い。もっと言うと、実行しようとしたときに誰がやるのかが抜け落ちてしまっている。基本施策の目指す姿のところで「地域で暮らし、活動するさまざまな人や団体等が、主体的に活動し…」となっており、その方たちが主体的にやることを認めてはいるが、それをこの計画に反映したときに、どこがまとめ役になっているのかというのがわからないと感じた。皆さんがこれを読んだときに、自分たちで動かなくてはいけないとか、こうやって連携してやらなくてはいけないというのを感じさせる内容でないと、なかなかその先にいかない。

倉持委員：

基本方針がそのままその市の総合基本計画だとしたら、この位置にあるのは違うと感じる。むしろ最初の方であって、それを検討していくときに、アンケートや他自治体の取組から新たに増えてきた視点や論点なり方向性というのがあって、それをどうするかという構成の方がいいのではないか。総合基本計画は変えられない大きな市の方針なので、それがこういうふうに出されていますというところを、「1」や「2」に掲載するという考え方もできるのでは。この会議の中での具体的な話は、具体論や考え方論として整理する仕方もあると思う。

委員長：

そういう意味では、この計画そのものの目的をどこかに書かないとずれが生じるのではないか。それを踏まえて具体的な取組に落ちていくのだと思う。計画は具体的に何をいつまでにやるということも含めて計画だと思う。計画自体の目的や意図が総合基本計画とは少しブレイクダウンした形でないと、あえてこの計画を作る意味がなくなってしまふ。基本方針を読んで、これが足りない、これを入れないと動けない、という部分がこの計画の目的に書かれていないと、意味がないと思う。

来住野委員：

「6. 基本方針」が6番目なのは違和感がある。地域にはたくさんの活動があって豊かに展開されていると思う。社会教育課がやっている「市民のニーズを生かしてつなげるあきしま会議」というのは、自治会も、サロンも、サークル活動をされている方も、いろいろな地域活動の方が集まって自分たちがなにをやってきたのか、なにがおきているのか、なにが昭島にあるのかということ話す。それを社会教育委員の皆さんが把握して、どのように生涯学習、社会教育として支えていくかという取組。先ほどリーダーという話が出たが、コーディネーターが必要なのではないかと思う。市の中で、自治会が、自主防災組織が、サロンがこういうことをやっているというのを、俯瞰で見ることができる方、私はそれがコーディネーターだと思う。そうした方々が必要だと思う。私は社会教育の専門なので、特に教育の中では今、コミュニティスクールと地域学校協働活動がとても重要だと思っている。これは学校教育の話のように思えるかもしれないが、地域学校協働活動は地域のコーディネーターが学校と地域を繋ぎ、その繋ぎ先が自

治会であったり、地域に住んでいらっしゃる方であったり、企業であったりというもの。となると、やはりコーディネーターがいるからこそ回るというのがある。私はつい、子どもに目が行ってしまう方だが、どんなまち昭島にしていきたいか、子どもたちをどのように育てていくかとなった時に、さまざまところが繋がっていくために、地域の中にコーディネーターが必要なのではないかと思う。

委員長：

皆さんに、なんとなく足りない言葉はなにかというのを考えていただきたい。例えば大山委員が言った「多様化」というような話や、「コーディネーター」や「リーダー」というような言葉。重なってもいいし既に出てきている言葉でもいいので、なにかポイントになりそうな言葉やキーワードなどがあれば出していただきたい。

大山委員：

コーディネーターのことを言っていたら、その通りだと思った。リーダーを1人置くよりもコーディネーターを配置。地域共生社会もそうだが、地域の困り事は地域で話し合っ、地域で課題解決に向けた方針を考えていくようにと国は言っている。これはあくまで理想のため、それを自治会の方々にというのはナンセンスだと自分では思っているが、自治会の枠を超えて地域でそのような話し合いの場があってもいいのかもしれない。高齢分野、地域福祉の分野においては、市から社会福祉協議会に委託して地域福祉コーディネーターや生活支援コーディネーターが配置されている。地域の困り事について、みんなで話し合っそれを解決するためにお手伝いしていくという人たち。地域で集まり、みんなで話して困りごと、あそこの人がどうだとか、こういうのがあったらいいよねというのを解決していくために、さまざまな団体の方々が集まって協議できるのが本当は理想なのかもしれないと思った。そのためにコーディネーターは、かなり大きな役割を果たす気がする。

委員長：

対話の場みたいなものが必要ということ。

高橋委員：

とても大事だと思う。現状として、例えば要支援者名簿。個人情報関係で、全体に見せられない。そのため、そういうのも作ってありますよという、絵に描いた餅の状態になっている。そうではなくて、逆に地域に溶け込んでいけば、隣近所でそういうものがわかり合える。困ったことがあったら、まず「大丈夫？」となる環境を作っていくことが、長く生き延びることができる道ではないかと思う。

大山委員：

和光市は市の職員と地域包括支援センターが全自治会に出向いて、土日に今後の福祉のあり方についての説明会を行っている。その場で、地域ごとの困りごとを皆さんに出してもらい、今後どうしていこうかというものを含め、地域における困りごとをマップ化していっている。ここの地域はこういうことが必要、こっちはこういうことが必要と

いうのを、市が重点的に施策を練って解決に向けてやるという方法をとっている。地域で本当に困っていることはたくさんあると思うが、それを市が吸い上げてないのだと思う。地域の困りごとがわかってくると、昭島市においてこういう活動ができるといい、となる。市民向けアンケートについて、回答してくれた方は自治会に加入しているの方が多い。地元で自治会にも加入していない方たちの意見も吸い上げられると、自治会の加入を促進する形にもなるかもしれない。話をする機会ができればいいなと思っている。

高橋委員：

取りまとめるところがいくつもあるからおかしな話になってしまっている。住民に対する窓口は生活コミュニティ課だけ、というように、どこか一つにしてもらえると、住民生活はうまくいくのかなという気はする。

大山委員：

極論からいうと、この会議も本当は生活コミュニティ課だけではなく、いろいろな課が出てきて一緒に話し合うという作業が必要なのかもしれないと思う。

委員長：

コーディネーターというのは、住民側だけではなく行政側にもいた方がいい。課を繋いでいく人がいると、非常にうまくいく気もする。

高橋委員：

同じことをやっても我々はボランティアだが、お金をもらってやっている方もいる。そうになってしまうと、地域住民と一緒に見守りをしようと言っても、「いや、シルバー人材センターに登録すればお金になるからそっちの方がいい」と言われてしまう。そうじゃないような気がする。それだったらそのお金を地域に落としてくれれば、地域で人を見繕って、ということもできる。できるところから割り振っていき、地域のことはまずは地域でしないと。

委員長：

この会議は立場の違う方が集まって議論している。それぞれの立場から考えたときに、なにか一つのところから、皆さんが繋がれるようなことはできないか。自治会に入っている人も入っていない人も、ボランティアをやっている人も、仕事でやっている人も、子ども関係、高齢者関係のことをやっている人も。市内全域とすると難しいが、ある領域、地域の範囲の中で、皆さんと一緒に話をして、こことここは一緒にやった方が早いとか。

大山委員：

あきしま会議は、結構、理想だと思う。自治会に加入していないPTAの方たちもいたり、さまざまな集まりで言いたいことを言っている。

委員長：

そこに自治会の方はいるのか。

来住野委員：

自治会の方もいらっしゃることはある。対等に話をする場というように設定させていたただいていた。その話はこの場だけ、否定をしない、誰かが1人だけ長く話さないというような約束事があり、その約束の中で話をする。対話の場を作ることで、若い方、中学・高校生も参加してくれた。市の職員も参加している。そうした声を素直に聞くものがあるといいと思う。それぞれの活動者が、なにが昭島にあるのかというのを知る。自治会の方々はこんな苦勞をしているのだというのもわかったり、若い人たちがそこに入ってなにかできることあるのかなと思ってくれたり、というのは起きていたと思う。

委員長：

高田委員、こういうふうにしたら、若者が皆さんともっと繋がれるみたいなものはあるか。あきしま会議について、最低限のルールがあって、いろいろな立場の人が1か所に集まり対話ができる場というものはいいと思った。

高田委員：

そのようなものに参加するのは、やはり生徒会とかなにか役割を持っている人。そういうものに興味がない人は本当に興味がない。例えば、はたちのつどいの実行委員を集めているという相談が市役所からあったため、後輩に声をかけているが、やりたくないという人が多い。受験を控えているとか、部活が忙しいとか、自分のプライベートが忙しいから参加したくてもできない。また参加したところで、大人がいるから自分の意見が絶対通らないだろうという固定概念があるので、自分の周りの人もなかなか参加しない。私も誘い方もわからない。そのようなところが課題かと思う。

委員長：

楽しくないと参加しづらいところはあると思う。

高田委員：

名前がかたいというか。

委員長：

対話の場において話をしたら、例えば自治会になんて入らないという人も、自治会って大事かと思うかもしれない。自治会の人、他の活動をしている人たちがいるという話を聞くだけで変わってくるかもしれない。文章だけで見ていると見えてこないものも、直接話すことで見えてくるというのはある。そういう場を作る、また既にそういう場があるというので、それは大事にしたいと思う。

大山委員：

土日に福島町の神社の盆踊りへ行った。地域活動とか自治会の加入率がというのはさておいて、参加人数がすごく多い。魅力的なコンテンツには皆さん参加してくると思った。福島町の実行委員長が「今日せっかくみんなが集まった。できれば帰りになにかの会に入ってもらいたい。自治会でも踊りの会でもおみこしの会でもいい。なんでも1か所入って帰ってもらいたいな。」ということをゆるく笑いながら言っていた。1人でも

2人でも増えて、だんだん増えていくといいなと思って聞いていた。そのくらいのゆるさの中で投げかけていくことも大事なのだと思った。運営する側からすると、本音としては手伝ってと言いたいと思うが、それを抜きに楽しもうというような雰囲気で行っていた。1000人単位で人が集まるわけだから、地域活動を馬鹿にできない。すごいと思っ

秋山委員：

ボランティア活動は楽しくないと続かない。自分たちが楽しくやっているところを見て、また入ってくれるというのを期待しながら、自分たちが楽しめることをやっている。年に1回、地域でビアガーデンをやる。役員たちがビールや飲み物などを出す。有料だが、ほとんど原価で儲けはない。そういう形で楽しみつつ、自治会活動が楽しいかなと思ってやっている。

委員長：

参加した人は、「自分たちが楽しい」というのを出すこともすごく大事。

秋山委員：

そう思う。

委員長：

キーワードとして、「楽しさ」や「ゆるさ」みたいなものも重要な要素だと思った。どうしても組織として考えると、いろいろな軋轢などが出てしまうが、困りごとやニーズからスタートしたときに、あくまでも組織はその後についてくるものというところもある。1つの困りごとについて、自治会だろうとテーマの団体であろうと行政であろうと、それぞれのアプローチと得意技でやれば良いという雰囲気が作ればと思う。例えば、最近はこの天候なので雑草がすごい。市の予算で刈っているが追いつかない。自分の家のそばにも市の土地があって草が生い茂っているが、市役所も対応が間に合わない。そういうものは、おそらく、いろいろなところに現れていて、それに対して、住民がなんとかやるという方法もいくらでもあると思う。みんなで解決策を出し合うことができる地域にしていくというのはありだと思っ

た。議論を進める中で、さまざまなキーワードが出たため、構成も少し組み替えていただいた方がいいと思う。

(2) 具体的取組について

【事務局説明】

委員長：

新しいことで、具体的にこういうことをやったらいいのではないかとアイディアベースをいただいて、それを整理して次回以降もう少しブラッシュアップしてい

くような内容になると思う。今日の時点ではいろいろな意見をいただいた方がいい。

高橋委員：

市の総合防災訓練。今ある団体全てに、総合防災訓練があるからぜひ参加してくださいという通知を出して、全体としてやるのが一つの連携になると思う。現状は、自治会員だけが集まってやっている。全体を巻き込むのであれば、そのような行事に際して、全ての団体に招待状を出したらどうか。高齢で逃げ込んできた、誰かに連れてきてもらったとか、そのような訓練も総合防災訓練でやっておいた方がいいのではないかと。また、市役所も、全庁を挙げてやってみてはどうか。要支援者だから連れてきたなど、そういう訓練があってもいいと思う。実践的なものをやれば、普段知らない人にも出会える。ただ集まって会議をただけでは、いざというときに全く役に立たない。結局、加入率30%の自治会が、避難所運営だってなんだってやっている。本来であれば、避難所運営だって、いろいろな団体が来ていいはず。楽しいことも大事だが、世の中楽しいだけでないということもわかった上で活動してもらわないと、正直者が馬鹿を見ている状態。なんでもかんでも自治会となって、我々もみんなと一緒に楽しみたいのに、いつも皆さんをおもてなしする係にさせられてしまっている。訓練だからみんな来いとして、その中で、こういうのが足りない、自治会ももっとこうした方がうまくいくのではないかと、という声をいただいた方が発展するのではないかとと思う。

伊藤委員：

地域単位で考えるとすれば、昭島市を地域ごとに区分けして、この地域にはこういう団体があるというのを、地域ごとの一覧を作ったりマッピングしたりするのはどうか。ここの地域にはこの団体がいるというのが分かるようなもの。代表者の連絡先程度は掲載し、各部署で地域単位の事業をやる時には、それをもとに案内状を発送するなど。また、例えば、自治会や地元のお祭りでも案内を出せるような体制があれば、人も集まってくる。こまめに更新していく必要があると思うが、そういった一覧表マップが地域単位で整備されていれば、どんどん案内状を出して参加してもらい、そこから連携を深めていくというようなことができるのではないかとと思う。

大山委員：

福祉の介護サービス事業者なども、法律が変わりなにかあったときも継続できるような計画BCPを立てるようになった中で、年1回の研修と年1回の避難訓練が義務付けられた。自分たちの集まりでは、こういう防災訓練があるから参加できる場所はしようと声をかけているが、声かけを全事業所にしていただければより出てくると思う。自治会の避難所の話で、私も能登や東日本の震災の後に被災地へ行ったが、高齢で介護を必要とする人たちについては、老人ホームやデイサービス事業者と連携しながら避難所の運営をしていかないといけない。そのため、今後、福祉の視点が避難所運営にはどうしても必要になってくると思う。高齢者が多いため、オムツ交換が必要だとか。そのような部分でも、自治会と介護サービス事業者が知り合って情報交換して行くのはいいこと。

そういうことをやっていただけるとありがたいと思った。

委員長：

避難訓練などは昔からの形式、つまり自治会がある程度全部取り仕切れる時代のやり方がそのまま続いていると感じた。現実には、いろいろな人と連携し、福祉の視点が必要なのであれば、福祉系の団体や事業者と連携しないと避難訓練の意味がなくなってしまふ。

大山委員：

エレベーターが使えないとなった時を想定すると、市内は高層住宅があるのでどうしようとなる。東日本大震災のときも、つつじが丘団地に居住でデイサービスに行っている方たちを上の方まで連れて行けなかったのが、デイサービスで一晩泊ませたということがあった。新しく東中神にできたURの団地の階段を使わせてもらい、2人がかりで運ぶ担架を利用しての訓練ができないかと話しをしていた。全市対応で、そのようなことをやらせてもらえると、昭島において発災があったらという話がリアルにできると思う。

高橋委員：

今の訓練は別々。しかし震災が起これば、輪になって被災していく。リアリティのない訓練というより、総合的にやった方が全体がわかるのかなど。

委員長：

現実離れしてしまったものが、おそらくいろいろなところにある。一度には変えられないと思うが、防災訓練という一つの事業、イベントから考えると、こうやった方がリアルになるとか、こういうところに関わるとうまくいくという議論が進む。

もしかしたら、今までやっていたことをリニューアルしたり、現実に合わせて形を変えていったりという作業をやることで、結構変わっていくのではないかな。いろいろな大変さが軽減されたり、どんな団体が地域にあるか知ることができたりもする。具体的なイベントから考えていくというのは、非常に有効だと感じた。

大山委員：

私は地域包括の立場の話が多いが、ボランティアのOK（おむすびころりん）プロジェクト実行委員会というもので、フードバンクからいただいたお米など活用し80人分のおむすびを作って第2・第4土曜日に無償で配布する活動をしている。ボランティアサイドでおむすびを作る人間が15～20人程度、また作ったおむすび85人分くらいがほとんどなくなる。地域の活動として月2回、100人くらい集まる場がそこにはでき上がっている。日ごろから顔を合わせ、最近子どもたちにおむすびの人と呼ばれたりする。地域を自転車で走っていると声をかけてもらったりもする。高齢の方に「今週の土曜ですよ」と伝え、「また行くね」というような繋がりもできている。この前は、玉川小学校で昔遊びの企画を実施した際に、子どもたちにおむすびと野菜をわざとたくさん入れたけんちん汁を食べてもらった。そういう活動を小学校のPTA活動とコラボしな

がらやってみたりもしている。また、8月の八清親和会のお祭では、自治会長に祭会場でおむすびを配らせてくださいと話したら、毎回自治会館を使用して活動しているからいいよと言ってもらった。自分たちの活動は、他の活動とコラボしながら広めていこうということを意図的にしているつもり。

自治会は自治会で頑張っているのだから、加入率にこだわらず今の自治会運営をして、いろいろな場所で好きなことをやっている人がたくさんいるから、そこと自治会をコラボできるような連携を推進する取組ができるとういのではないかな。場合によっては自治会員が増えるかもしれない。既存の自治会と周りが繋がれるような、新しいコミュニティ作り。今までのものを大事にしながらどうできるかということを考えてもいいのではないかなと思った。

委員長：

連携と聞くとぼやっとするが、コラボというとなら具体的なになる。その表現の方が、どうやって一緒にできるかということを考えるのに、すごくわかりやすい。

来住野委員：

大山さんそのものがコーディネーターだと思って聞いていた。コーディネーターは大事だと思っている。先ほど、マップ作りの話が出たが、それを作りたい市民の方が集まって作るのはどうか。こんな団体があるのだということを知る人たちが増える。その作業そのものが、コーディネーターの育成や養成に繋がる。参加者はそんなつもりはなく集まると思うが、作っていく中で、こんな団体がいる、こういう場所があるのだということを知っていく。

自治会連合会で作成したお祭のマップを見た。こんなお祭が近隣であるということがわかるだけでも楽しかった。そうした作業を市民の方々がすることで、いろいろなことを知って、あそことあそこが繋がってみたいのではないかな、というようなことができる。なにかを作ることによって、繋がりができるのではないかなと思う。また、だれかとだれかをつなげたい、と、自分から思い活動する人が出てくる。人材の発掘をやりたい人は絶対いると思う。

また、小さいころからいろいろな地域での体験に参加して、地域の大人の姿を見て育った子どもは、地域の中で役に立ちたいと思ったりもする。はたちのつどいの実行委員の話も出たが、若い人たちにとって、大人の姿は見えていないから、怖くて頼れないのかもしれないと思った。大人が楽しく活動している姿を見せるというのも大事だし、楽しく見えるものがあつたら地域の人も楽しいだろうし、そういう感覚が昭島にいっぱいあるといいと思う。

委員長：

今までは、地域の困りごとや、社会課題、地域課題の解決という話を中心だったが、倉内委員の専門である社会教育や生涯教育などと社会課題解決との繋がりというのもコラボだと思うが、そのあたりはどう考えたら良いかな。

倉持委員：

課題があって、その解決を図るというのもあるが、「楽しさ」とか「学び」とかがまず集まって、最終的には課題解決に繋がるというアプローチの仕方もあると思う。最近、若者たちは、居場所やコミュニティカフェ、サロンなどに関心を持つ。一人ひとりが交流を通して自己実現をしたり、孤立を和らげたりということと、それが地域作りや地域課題解決に繋がったりするということに若い世代は関心があると感じる。公共施設も活用できると思うが、民間の施設やカフェ、商店街などを活用してというのもあると思う。

どうしてもボランティアや地域活動は、裏方感があるというか、始めたら抜けられない感がある。また、やらされ感。やっている人たちは、カッコいいもの、おしゃれなもの、素敵なもの、役に立つもの、と思っているが、やらない人たちは警戒感みたいなものがある。そうすると、情報発信や、具体的にやっているところや、やっている人を見せる必要があるのではないか。パンフレットでもいい、マップもその1つ、ラジオ、動画、ニュースレターでもいい。

あるいは、若者が就職活動をする際に、インターンシップや体験があるのと同じように、地域活動体験、ボランティア体験、実習、少しお試しができる余地があってもいいと思う。お試しの機会があって、合わなかったら辞められるというような間口の広さがあってもいい。また、この活動している人と別の活動をしている人を思い切って入れ替えて人事交流みたいなこと。あえて領域とか活動地域が違う人を掛け合わせてみるようなお試しもありかと思う。

自主的、自発的な運営は、同じ人がずっとリーダーを続けていて、次に引き継ぎが難しいということもある。運営の仕方そのものを学んだりケースをお互い知り合ったりできるような場や、相談に乗ってくれる場、交流できる場を作るということも、緩やかにつながっていくというところではあり得ると思った。

委員長：

先ほど、はたちのつどいの実行委員になかなか参加してくれないという話があったが、こういう感じであれば若い人も結構出てきてくれるとか、こういうものだに興味を持って参加しやすい、というようなものはあるか。

高田委員：

一緒にやろうと言って、1人で参加するのではなく巻き込む。「興味はあるけど1人で行くのは怖いから一緒に行ってくれない？」というように。1人で行動するのがすごく怖いというか、周りの目を気にしてしまう。そういう点では、誰かと一緒にいるというのは心の支えにもなるし、参加しやすいと思う。

委員長：

先ほど話していたお試しとか、義務感が強くないとか、そういうことも大事か。

高田委員：

そうだと思う。

委員長：

若い人だけではなく、大人もそういう面はあるか。新しい活動に参加しようとしたときに、試せたり、あまり強制されないとかだったり、ゆるさみみたいなもの、もちろん楽しさもそうだが、そのあたりは共通しているか。

幸田委員：

自治会が中心となって他の団体とコラボと言っても年代が合わない。地域には、自治会、中学会・小学会のお母さんたち、J A昭島の女性部の人たち、若睦の人たち、太鼓の人たちなどいるが、それぞれ別々。若いお母さんは若いお母さんで固まっているし、年寄りも年寄りで固まっている。しかし、お祭りのときはみんなまとまる。いつでもどこでもまとめようとしなくて、なにかあったときはまとまりましようとしておかないと無理だと思う。私達はこれが好きでやっている団体で、あなたたちと一緒にやりたいからやっているのではない、でもなにかあったときは一緒にやる。というようにしておかないと、やはりおじさんと若いお母さんはなかなかうまくいかないと思う。

大山委員：

私たちは東中神多世代プロジェクトというのを立ち上げて、PTAの方々と地域の高齢者と一緒に毎月1回会議をしている。初めはやはり高齢の方が、「いやいやそうした方がいいよ」というような感じでも、回数を重ねていくと、むしろお母さんたちの方がこういうことをやってほしいというリクエストを出すようになる。会う機会を増やすことが大事だと思っている。会議をなさないとはいわないが、そういう機会が増えて少し警戒感が取れてくると、若い女性の方たちでも結構話してくれるような気がする。

高橋委員：

先日、盆踊りやったが、子どもはやぐらがあるから登りたいと言う。それを見た高齢者は危ないから下ろせと言うが、子どもがせっかく興味を持って登りたいって言うのだから乗せてあげた方が良かった。シャボン玉を持っている子がいたから、シャボン玉大会をやろうと言って、シャボン玉を持っている子を集めてやぐらに上がらせ、誰が大きい、誰がいっぱいできたか、ということをやった。そのうち踊りたいという子が出てきたが、自分達が用意する曲は古い。子どもたちの踊れるという曲は、自分たちの持っている曲の中にはない。たまたまいた駐在さんに携帯からYouTubeで流してもらい、それをマイクで拾って踊った。そうしていると、全然知らない保護者がこの曲もやってくれないかとか言ってくる。やっぱり盛り上がる。知り合うまで、本部のおじさんたちにこの曲リクエストしたい、なんて普通言えない。何回も踊りたいと言う。それが良い楽しい思い出になってくれれば、来年にも繋がっていく。

大山委員：

高齢者は知らない曲ばかりで我慢してるいかもしれない。でも、そういうことが双方であれば、段々一緒に居られる場ができてくるような気がする。

高橋委員：

我慢はしていないと思う。せっかく来ている人たちが楽しい思い出になることを少しでもしてあげないと、地域は活性化していかないと思う。我々の盆踊りの例をみんなやれとかではなくて、みんないろいろできることがあると思う。そういうことを少しずつ進めていかないと、コミュニティは成り立っていかない。そういう子がゆくゆくは大きくなって、町内会でお祭やっていたよね、入りたいね、と言ってくれるといいなと思いつながらやっている。何十年か計画。今日やったから明日結果が出ますという話ではないため、まずは今の加入率を維持しながら、数年後に少しずつ増やしていくという地道な努力をしている。

楽しいことをやっていけば、会員だろうが会員でなかろうが集まってはくる。手伝うか手伝わないかはまた別問題として、お客さんでいることはウェルカム。まずはお客さんでもいいから、とりあえず来てもらえることが我々の一番の目的。だからイベント情報マップを作って、まずは来てください、見てください、寄って行ってください、買い物してくださいとしている。それが回りまわればもう少し形あるものができるのではないかと思う。

倉持委員：

今の話はすごく面白い。高橋委員が子どもの関心や来た人を受け止めて、すぐその場で対応しようとしたから、参加された人たちは、ちゃんと伝えたら応えてくれる人がいるのだと思える。そういう人がいるということが、繋ぎ目、コーディネーター、世代をまたぐキーパーソンだと思う。しかし、高橋委員のような人がどこにでもいっぱいいるわけでもない。それこそ、盆踊りを来年どうしたらいいかを考えると、古い機械をどうするかということや、曲を考えることなど、次の世代の人に、運営のその部分だけでも入ってもらおうとか任せてしまうみたいな繋がりができたら。最初はすごく揉めると思うが。

国分寺の公民館で、地域のいろいろな人たちが集まる地域会議のようなものを立ち上げたが、運営は地域の重鎮である自治会長たち。そうすると、子どもたちや若い世代のことがわからない。そこにPTAや地域のいろいろな団体を入れていったが、世代が全然違うため、忙しいのにできないなどのやりとりがあった。しかし、ある時から会長たちが若い世代に、このブロックはもう皆さんにおまかせする、というようにまかせたところ、意見を出し合える感じになり、PTAをやめてもこの活動を続けたいという保護者が少しずつ出てきた。任されるというのもすごく大事だと学んだ。

盆踊りというような具体的で楽しい活動だったら、やりたいとか、やってもいいとかいう人が加わったらいいなと感じ、すごく面白い事例だと思った。

委員長：

先ほどの話で言うと、高橋委員がシャボン玉大会をやったのが結構大きかったと思う。

高橋委員：

本当にそこで風が変わった。

委員長：

ここではこうやって子どもたちが楽しめる、と思ったから、安心していろいろ言えるようになったというところもあると思う。壁を取り払う瞬間みたいな。コーディネーターというのはまさにそういう役割をするのだと思う。そういう小さな積み重ねを組み合わせていくしかないのかなという感じはする。どうしても最初は、衝突や、なんだろうあの人、というようになってしまう部分はあると思う。

今日はすごくいい議論、話ができたとと思うが、こういうものを計画にどう表現して入れていくか。ジャストアイデアだが、他市の事例よりも、今のような話を書いた方がいいような気がする。昭島市内でこんなふうに行っているということ。おむすびの話やあきしま会議の話など、こうやって人と人とは繋がって一つの壁が取り払われる瞬間、皆さんが繋がれているというようなことを紹介した方がいいのでは。繋げていくということが体感できる例。文章にすると難しいが、そういうものを計画にうまく表現できると、今までの計画とは違うものになっていくような感じがした。

今日は我々の姿勢というか、大事にしないといけないと思っていることが少し見えてきた感じがする。それを踏まえてブラッシュアップをしていただき、次回また議論ができればと思う。

(3)その他

【事務局より連絡事項を説明】

委員長：

皆さんが率直に話してくださるのでいろいろなものが繋がってきたという印象を受けた。会議のプロセスそのものが、地域コミュニティの在り方を考える上でのヒントになる気もする。このような活発な議論を次回もお願いできれば。